

大学の壁を越えて陶芸家と研究者が連携しデザインと技法を伝える

共同研究「現代日本陶芸のデザインと技法」

活動の目的

共同研究「現代日本陶芸のデザインと技法」は陶芸家が作品性の向上を目指して協働し、その成果をウェブサイトで公開することで、陶芸への理解と興味を喚起し文化の振興に寄与することが目的である。2019年に瀬戸内市立美術館でその成果を展示する。

活動の内容及び経過

本共同研究はこれまで3年継続しプロダクトデザイナーや現代陶芸作家の参加を得た。2017年7月15日に斎城卓が12点の作品撮影を岡山県立大学で行い、2018年2月17日に10点の作品撮影を実施した。平成29年度岡山県立大学地域貢献特別研究費助成で、ミシガン大学美術館インターン Robert Morrissey氏が、同美術館副館長及部奈津氏の監修で翻訳を行った。富本憲吉著「The World of Japanese Ceramics」1964年を用語参考文献とした。斎城卓の作品写真画像を元にウェブサイト「現代日本陶芸のデザインと技法2018」を、英文を含めてアップロードした。

2019年1月13日(日)から2月3日(日)に瀬戸内市立美術館主催特別展準備として、2017年9月岡山県立大学デザイン学部展示ホール改修における65台の作品展示台廃棄処分を受けて、瀬戸内市立美術館館長から岡山県立大学デザイン学部長に作品展示台譲渡依頼を行い、2017年9月25日に廃棄予定の展示台の修繕と梱包を共同研究メンバーが行った上で、9月29日にトラック便で美術館に移送した。

活動の成果・効果

1 活動の成果(ウェブサイト2018掲載のデザインと技法)

著者名、「タイトル名」、発表日時は全て2018年3月31日

1) 中西美美「下絵具による三段階装飾技法」エアブラシをメインに、筆による彩色、搔き落としによる描画をプラスすることで、モチーフの特徴やカラーを際立たせることを目的とした。

2) 久保田厚子「ハイブリッド青白磁技法3」傾けた焼成用棚板に皿を載せて焼成し、釉薬を斜めに溜める技術をハイブリッド青白磁技法3とした。

3) 久保田厚子「ハイブリッド青白磁技法4」繊細で複雑なレリーフの青白磁を非常に薄いカップで成形した。従来は皿の内側だけの表現をカップの外側にレリーフする新しい技術を開発した。

4) 久保田厚子「ハイブリッド青白磁技法5」青白磁の鑄込みレリーフが光を通して影絵に見えたことから、青白磁シェードのペンダントライトを制作した。

5) 久保田厚子「ハイブリッド青白磁技法6」レリーフがある石膏型に粘土を押し当てる前に、泥漿を塗る方法である。

6) 久保田厚子「ハイブリッド青白磁技法7」植物レリーフ石膏型に磁器粘土を盛り上げて、小さな青白磁のボタンを制作した。



7) 栗原慶「波紋鉢制作ノート」空間を内包したロクロの造形を活かし波紋と造形が協調する表現を目指した。

8) 作元朋子「積層で作る造形」石膏型を使い、ストライプの幅ごとに分かれたパーツを重ねていく方法。石膏型の成形方法を見直し、作品の外からは見えない部分に構造としての壁を作ることにした。泥漿にCMCを加えたものを糊にして接着した。

9) 齋藤香織「制作雑感」

10) 藤内紗恵子「トルコブルー釉を用いた平皿の制作」トルコブルー釉と磁器の組み合わせは、熱膨張差が大きすぎ、生地にまで割れが入ることが多いため、これからも研究が必要である。

11) 谷野明夫「堆彩技法による作品の色々」技法による色化粧の器や陶板、そしてボタン等の作品のバリエーション。

12) 柴木正敏「呉須象嵌による磁器」エッチングのような線刻による手描きの模様。呉須象嵌-素焼した器を、線刻した溝に特殊な筆で呉須を埋めて描く。筆屋で売っていない針を仕込んだ筆を自作した。

13) 今田拓志「美術分野における陶芸表現の独自性について」電動ロクロ成形によってかたちつくられる形状に焦点を絞り、器のかたちを立脚点として設定して考える。

14) 三浦義広「電気窯によるサヤ鉢を用いた焼成法」

2 活動の効果

グーグルの文字検索で上位にヒットする状況になった。

今後の課題と問題点

2019年1月13日(日)~2月3日(日)瀬戸内市立美術館展示の①広報の課題、②出品作品レベルの課題、③ウェブサイトと美術館展示をリンクさせる課題、④展示期間のワークショップとギャラリートークについての課題

- 代表者：久保田厚子 ●所在地：総社市窪木
- TEL：0866-94-2052 ●E-MAIL：kubota@dgn.oka-pu.ac.jp
- URL：http://cdatoma.tumblr.com
- 設立年：2015年 ●メンバー数：22名